

令和6年度 調布市立富士見台小学校 学校評価報告書（学校長 小俣弘子）

学校の教育目標
㊦深く考える子（知識や技能を身に付け、それらを活用し、問題の解決に向けて追究することができる児童）
㊧自他を愛する子（自他を尊重し、認め合いながら協力して行動することができる児童） ㊨自ら鍛える子（自分のめあてを自覚して、工夫しながら粘り強く取り組むことができる児童）
目指す学校像(ビジョン) 例) 学校像, 教員像, 児童・生徒像
1 自分の思いや考えを表現し、他者と協働しながら 自分を伸ばすことができる学校
2 安心・安全な環境の中で楽しい生活を築くことができる学校
3 信頼される学校

調布市立学校における共通した領域 ＜短期的な経営目標＞						
	① 豊かな心(徳)		② 確かな学力(知)		③ 健やかな体(体)	
自己評価	(1) 具体的な取組	評価	(1) 具体的な取組	評価	(1) 具体的な取組	評価
	① 自他共に大切にしている児童を育成するために、人権尊重の精神に基づき、多様性を認める授業や活動を実践し、誰に対しても相手を大切にしている思いをもち、あいさつなどの言葉遣いや行動に表すことができるようにする。	B	①自ら課題をもち、主体的、対話的に考え、問題解決できる児童を育成するために、授業改善を積極的に行う。【タブレット端末の利活用、ユニバーサルデザインの視点(ハンドサイン等)、少人数指導等】	B	①安全面(食・災害・交通・生活等)において、児童には、正しい知識を身に付けさせるとともに、教職員全員の危機管理意識を高度に保つ。教職員全体で、元保護者による講話及び年3回の食物アレルギー研修とシミュレーション訓練の実施を通して、対応マニュアルの周知徹底と確実な実施を行う。	A
	②「学習&生活のルール」を全校で共有し、規律の定着を図ることで安心できる生活環境を整える。また、いじめに関する授業の実施及び研修を通して、教員の指導力向上を図り、いじめのない安心した環境を作っていく。	B	②自分のよさや可能性を伸ばすために自らを鍛え努力を積み重ねると同時に、一人一人の頑張りを周りの人が認め、褒め、励ますことで自分に自信をもち、自己肯定感や自己有用感を高めるようにする。	B	②体力向上を図る取組や外遊びの推進、運動会を工夫して実践し、運動の楽しさを味わわせる。また、体力テストを通じて課題を見つけ、改善に向けて取り組むようにする。	B
	(2) 成果(数値目標に対して)	評価	(2) 成果(数値目標に対して)	評価	(2) 成果(数値目標に対して)	評価
	①学校評価アンケートにおける肯定的評価 ・「自他を愛する」(児童)に関する項目 目標 91%以上 結果88.2% ・「自分はよく挨拶をしている」(児童)で、 目標 90%以上 結果 82.9%	C	①学校評価アンケートにおける肯定的評価 ・「学力定着 分かった できた」(児童・保護者) 目標 91%以上 結果児童 86.2%・保護者 91.2% ・「少人数指導」(児童) 目標 85%以上 結果 77.1% ・「タブレット端末を積極的に授業で使っている」(教員) 目標 100%結果 95%	B	①・児童のけがや食物アレルギー事故及びヒヤリハット事例ゼロは目標達成できた。 ・学校評価アンケート(児童・保護者・教員)「安全・安心」の項目 目標 95%以上 結果児童89.2% 保護者94.9%教員100%	A
学校関係者評価	②学校評価アンケート(児童)において ・「基本的生活習慣」に関する項目 目標 85%以上 結果 83.8% ・「学校には友達がいて楽しい」の項目 目標 90%以上結果 93.1% ・「いじめは、どんな理由があってもいけないこと」で目標 100% 結果92.7% (全国学力調査・質問紙)	B	② 学校評価アンケート(児童)において ・「自分にはよいところがある」 目標 83%以上結果 75.6%	C	②学校評価アンケート(児童・保護者)において、健康教育の項目への肯定的な回答 目標 90%以上 結果 児童87.6% 保護者91.9%	B
	あいさつの項目で児童の評価が4%ほど評下があった。日常の様子からは、「おはようございます」「こんにちは」など自分から言っている児童が多い。挨拶は、「相手を大切にしている行動」として、引き続き推進していく。周りの大人が、どれだけあいさつでかわり、コミュニケーションをとることができるかということも、大きく影響してくると思う。教職員、地域・保護者の方と力を合わせ、挨拶を大切にしている児童を育成していきたい。 いじめに関してどんな理由があってもいけないことの徹底をしっかりと指導してもらいたい。		「自分にはよいところがある」の項目では、否定的な児童は少ないが、「分からない」と回答した児童が昨年度より多くいることが分かった。A 評価「よくあてはまる」が半数になったことはよい評価と捉えている。「分からない」と回答している児童はもちろん、児童全体にこれからも一人一人のよさを認め、褒めたり励ましたりする活動を重視していく。そして、一人一人に自分に自信をもたせる工夫、よさをその子自身に実感させる活動を行っていく必要がある。		安全に関して、避難訓練時に児童自身もまじめに取り組んでいる自覚があると考え。今後も、自ら判断して身を守る行動が取れる児童に育てていくことを大きな目的として取り組んでいく。災害時だけでなく、生活、交通に関する危険を予測し安全な行動がとれるように学習を行ってきた。 食物アレルギーに関する対応においても引き続き研修を重ね、注意を払って進めていく。	
学校の特色を生かした領域 ＜短期的な経営目標＞						
	④ 言語能力・情報活用能力の向上		⑤ 特別支援教育		⑥ 地域との連携	
自己評価	(1) 具体的な取組	評価	(1) 具体的な取組	評価	(1) 具体的な取組	評価
	① 協働的な学び(自分の考えをもち認め合い高め合う中で学習を深める)の充実を図る。また、タブレット端末等を活用し、必要な情報を集め判断する活動を通して、言語能力・情報活用能力の向上を図る。	B	①計画に沿った特別支援学級児童と通常の学級児童との交流・共同学習を進め、多様性尊重への理解促進を図る。	A	①「地域学校協働本部」の活動を更に充実させ、「放課後学習教室」や「漢字検定」、外部人材の活用等の取組を児童の学習意欲向上につなげていく。 また、令和7年度から始まるコミュニティスクールの準備をすすめる。	A
	②年間2回の読書月間を中心に読書活動を推進するとともに、日常的な言葉遣いの指導等を通して、言語感覚を養い、豊かな言葉の獲得を目指す。	A	②特別支援教室や個別指導等での学習が、在籍学級での指導・支援に活かされるよう、専門員やコーディネーターを窓口として円滑な連携が図られるようにする。また個別最適化した支援や環境を提供できるよう相談体制の充	B	②学校だよりやホームページ、すぐーる、クラスルーム、保護者会等を通じて学校情報を共有し、共に同じ方向を向いて児童を育てる意識を高める。	A

			実も図る。			
	(2) 成果（数値目標に対して）	評価	(2) 成果（数値目標に対して）	評価	(2) 成果（数値目標に対して）	評価
	① 学校評価アンケート（児童・保護者）において、 ・「思ったり考えたりしたことを話し合っている」目標 87%以上 結果児童 81.7% 保護者 92.7% ・「ICT 機器の活用」目標 95%以上 結果児童 92.7% 保護者 92.5%	B	①・かしわ学級との交流機会を各学年で位置付ける。（月 1 回以上）また、かしわ学級が各学年との交流機会をもつことができた。 ・人権週間等において、多様性を理解する授業を設定する。（12 月に各学級 1 回以上）実施することができた。	A	①学校評価アンケートにおいて、「地域学校協働本部」（児童・保護者）への肯定的な回答 87%以上を目指す。また、保護者の「分からない」への回答 目標 12%以下 結果 15%	A
	②学校評価アンケート（児童・保護者）において、「読書活動」項目への肯定的な回答 目標 83%以上 結果 児童 82.8% 保護者 92.4%	A	②学校評価アンケート（児童・保護者）において、「相談体制」に関する項目 目標児童 92%以上、保護者 75%以上(R5 結果児童 88.5% 保護者 78.8%	B	②学校評価アンケート(保護者)において ・「開かれた学校 情報発信」に関する項目で 目標 95%以上 結果 94.9%	A
学校関係者評価	主体的で対話的な授業展開、自分の考えを表現する機会の設定が授業の中で定着してきた。教えられるだけでなく、自ら考えたことを話し合い、考えを広げたり高めたりすることが児童の思考力、判断力・表現力を伸ばすために求められている。全教員の授業力を向上させることも課題である。 読書活動では、読書記録で賞状を取り入れたり、委員会での発表を行ったりしたことで評価が上昇した。今後も継続していく必要がある。		「相談体制」の項目では、保護者の肯定的評価が 7%ほど上昇した。内訳として「分からない」という回答が減少した。今年度は、学校便りでの相談窓口での紹介、「カウンセラー便り」を通じての相談方法の紹介、3 学期の希望制個人面談の設定を行ってきた。また、相談窓口として学校・保護者・地域という広い受け皿で児童の困り感に寄り添う体制を今後も大切にしていける必要がある。		地域学校協働本部の取組は、毎日の学習支援員の派遣、放課後学習、漢字検定、ゲストティーチャーの派遣等、日々の学校教育を支えていただいている。また、ボランティアとして毎朝、オレンジのベストを着て児童の登校の安全を見守ってくださっている。「地域とともに育つ子ども」を目指して、今後も連携を深めていく。地域学校協働本部のコーディネーターの方の運営の素晴らしさ、児童を温かく見守ってくださる活動に感謝している。	

人材育成・組織運営	
自己評価	・主幹教諭をリーダーとして主任教諭の能力を生かした OJT の充実（月 1 回）を図る。（若手教員の育成、授業力の向上） →今年度も継続して主任教諭が育成者として自分の専門性を生かした OJT を行うことができた。若手教員の育成ができたことと、主任教諭の育成意欲につながったことが成果である。日常的な OJT については若手教員中心に行っているが、日々の授業に生かされることが今後の課題である。 ・調布市教育委員会の研究推進校を受けることで 2 年間を通じて「安全教育」について組織的に研究を積み重ね、児童の安全な生活につなげていく。 →校内研究として「生活安全」「交通安全」「災害安全」「いのちの安全教育」の 4 分科会に分かれ研究を深め、授業を実践できたことは成果である。また、日常的な避難訓練や安全指導、安全点検も実効的に行われるよう各教員がチャレンジできたことは成果である。 ・組織の一員として、担当の分掌に責任をもち、前年度踏襲に終わらず、校務改善に向けて改善案を提案する。 →自分の分掌において、児童の実態や現代の課題に応じて改善する目標を自己申告時に設定できた。また、年間通じて起案時の指導・助言を行うことで児童や現在の実態に応じて前年度踏襲にとどまらず、改善意識の向上につなげることができた。 ・教員が健康で澁涸と児童の教育に邁進できるように、ライフワークバランスを推進する。（在校時間の管理（月平均 45 時間以下 70%） →在校時間は、70%以上となり、働き方改革を進めることができた。しかし、一部の教員の在校時間が長いため、業務を減らすなどの対応をとることができた。
学校関係者評価	授業観察時には、どの先生も元気に授業をしている様子を見ることができた。特に若手の先生の成長が学期を重ねるたびに見られた。OJT や研究授業など日頃から育成が図られていた。研究授業（安全教育）では、先生の指導法を見ることで教員全体の学びになっている。組織運営として、教職員で協力して取り組んでいると感じる。 いじめや不登校に対して学校全体で、児童の相談体制を充実し対応できるように引き続き行っていただきたい。 今年度も、地域学校協働本部の支援を様々な面で活用し、チーム富士見台として児童を支えることができたと考える。

中期的な経営目標の達成状況	
1 自他共に一人一人を価値ある存在として尊重し、いじめや不安がない安心して過ごすことができる環境づくりをする。 →学校経営方針の中で発達支持的な生活指導の第 1 層を日常的に取り入れることを教員に共通理解した。このことにより日常的に、教職員から、または児童同士で認め合い、励まし合う言葉かけを常として自己存在感、自己肯定感の向上に努めることができた。「自他を認める」児童 88%と、様々な取組により人権感覚の醸成が図られたことが成果である。今後も児童の実態や現代社会の課題に応じて人権感覚の醸成に取り組んでいく。また、児童や保護者の不安に対応できるように相談体制についても周知、実行できたことは成果である。 2 主体的で対話的な学びを通して自ら問題を解決し、自分の可能性を伸ばしていく児童を育成する。（自己肯定感の向上） →「自分にはよいところがある」の肯定的評価は 75.6%であった。どちらも否定的な回答は少ないが「分からない」という回答が 15%以上あった。このことによる、児童一人一人によさを実感できる取組みを今後さらに充実させる自己肯定感を高め自分に自信をもって次に挑戦できる児童を育てることを継続して取り組む必要がある。 3 健康保持・体力増進に努めるとともに、自分の命を大切にするための安全な生活ができる児童を育成する。 →「健康な体をつくろうとしている」87.6%「安全な生活ができていいる」89.2%と概ね達成できている状況である。今年度より、安全教育を研究テーマとして取組み、生活安全だけでなく、交通、災害安全、生命（いのち）の安全教育にも力を入れ、児童自ら危険を予測し、回避できる力の育成に取り組んでいる。来年度も継続して取り組むことで安全な環境、危険を回避する児童の行動力を高めていく。 4 全ての基盤となる言語能力と情報活用能力の向上を目指し、言語環境を整えるとともに読書活動の推進や対話的な学びの充実を図る。 →「言葉や文字で伝えたり、話し合ったりできている」81.7%「よく本を読んでいる」82.8%であった。読書活動については、具体的な取組により昨年度より肯定的評価が上昇したことは成果である。しかし、「言葉や文字で伝えたり、話し合ったりできている」では児童の評価が下がっている。今後も授業の中での対話的な活動を重視して行っていくことが課題である。 5 通常の学級・特別支援学級・特別支援教室等の組織的連携を図りながら、個別最適化した特別支援教育を推進していく。 →特別支援コーディネーターが担任や通級指導教室の教員と連携を図り、児童の実態を保護者と共有しながら通級指導や個別指導等につなげることが継続してできたことは成果である。「相談体制」について保護者の評価が上昇したことも成果である。今後も、本校のよさである「かしわ学級との交流」「にじいろ教室と学級との連携」「あおぞら教室等の活用により不登校支援の強化」を継続し個に応じた対応を強化していく。 6 保護者・地域と連携し、学校情報を共有し共に児童を育てる意識の向上を図るとともに、CS へ向けた理解促進に努める。 →「地域学校協働本部の活動」保護者 83.2%「学校の情報共有」保護者 94.9%とよい評価となっている。令和 7 年度からの CS に向けて学校経営方針を共有し、「地域と共にある学校」を目指し取り組んでいく。 人・組 職層に応じた自身の役割を自覚し、学校経営方針を実現させるための取組を工夫しながら取り組むことができる組織。 →教職員の自己申告や面談を通じて学校経営方針に即した具体的な目標を設定し、目標達成に向けて取り組んだことは成果である。 若手教員の指導力向上に向けて教職員全体で高めていくことが継続した課題である。今後も、職層に応じた役割を自覚し、組織として学校改善に取り組んでいけるようチーム力を高めていく。	
次年度の重点課題	
「自己肯定感を高め、自分に自信をもつ」…認め、励まし高め合う環境 主体的で対話的な深い学びに向けての授業実践 「自分も相手も大切にする言葉や行動をする」…あいさつの励行 相手を大切にする言葉遣い 「安心・安全な学校づくり」…安心する居場所づくり 安全な環境。児童自ら安全に生活できる行動力の育成	